

國語

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、文章には設問の都合上、一から十の段落番号を付してある。

〔一〕 かつてフィリップ・アリエスは中世以前の絵画に描かれた子どもが、実際には大人の顔をしていることを指摘して、当時は「子ども」という概念が存在せず、近代になつてはじめて独立した幼年期というものが意識されるようになった、という見解を示し、おおいに物議をかました。たしかに一八世紀から一九世紀にかけては、イギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの「無垢の歌」「経験の歌」に見られるように、子どもという存在そのものの新鮮さとの出会いをケイキに、^(ア)そもそも無垢とは何か？ 幼年期とは何なのか？ といった問いを立てるような文学作品が書かれるようになっていく。「子どもは大人の父」と歌ったウィリアム・ワーズワスは、むしろ幼年期こそが人生の黄金時代だとして、その「オールド」の中でも、人間は成長するにつれて誕生以前から引き継いできた輝きを失ってしまうのだという人生観を示している。ルーシー詩篇^(a)その他彼の多くの詩作品の中でも、幼年期の希^{まれ}なる輝きが愛^{いと}おしいものとして語られているのである。

〔二〕 こうした幼年期の主題化は、一九世紀から二〇世紀にかけてはノスタルジックな幼年期の描写に引き継がれていく。一九世紀を代表するイギリス作家であるジョージ・エリオットとチャールズ・ディケンズはしばしばその作風の違いゆえ対照的な二人と見られることが多いが、二人ともに幼年期を主題化した作品を書いているのはおもしろい。エリオットの『フロス河の水車場』にしても、ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』や『荒涼館』にしても、^(あ)若い人物を語り手や視点人物に据えた作品なのである。やがて二〇世紀にあらわれたジエームズ・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』やマルセル・ブルーストの^(い)『失われた時を求めて』といった作品では、幼年語りそのものに洗練が加えられていく。単に視点が幼年期に設定されているだけでなく、幼年者ならではのものの見え方や、感情、言葉の使い方などをより^(イ)セイチに作品の語り口に反映させようとする工夫が見られるのである。とくに文体操作を得意とするジョイスは、『若き日の芸術家の肖像』で視点人物が成長するのに応じてその語り口も年齢的な変化を示すという仕掛けを^(ウ)ホドコし、後の作家たちに大きな影響を与えた。ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』などは、大人の常識や知性のおよばない無垢な精神を言語でとらえようと、精神障害者を視点人物に据えるという試みまで行っている。

〔三〕 このXの例にもあらわれているように、幼年期への注目は、無意識的なものや狂気への関心と併行している。そもそも人間の心に「無意識」なる領域があつて、それがときには想像力の源泉にもなるけれど、ときには悪さをして本人にも理解できないような奇妙な行動をとらせてしまうという考えは、フロイト以来すっかり定着してきた。フロイトの理論では、大人の精神疾患の中に幼時体験にその原因を^(エ)サカノボることのできるものがあるとされたわけだが、このように幼時体験が大人になつても、大人的な制御意識の及ばない無意識の領域

に入りこんで生きノびるというあたりに、今日、私たちが持つようになった幼年のものに対する見方の原型がある。^(b) 幼年期の体験が、心の薄暗い領域に人目につかない形で住み続けるというのである。

四 もちろん、すべてをフロイトのせいにはできないわけではない。フロイト流の無意識観を作り出したのは、目には見えないけれどたしかにそこにあるもの^(c)に反応する感性だった。こうした感性は、超越者を想定するあらゆる宗教で共有されているとも見ることができ、とりわけ一九世紀から二〇世紀にかけての欧米では心霊主義や中世以来のネオプラトニズムの再流行と、科学技術の進展に伴うX線や電波についての知見とが妙な形でからみあうことで、目に見えない靈魂^(カ)が飛びカつていたといったオカルト的な言説が広く流布した。カシミール・マレービッチのような画家は、そうした四次元の世界をキャンバスの平面に描き出そうとさえしている。宗教の力が衰えたと言われながら、この時代、以前にも増して見えないものの存在感は強くなっていたのである。

五 そうした状況の中で、今ひとつ宗教なき後の疑似宗教として機能するようになったものがある。カウンセリングである。すでにフロイトが患者に対して行った精神分析にも現代のカウンセリングの先駆けは見られるが、より明確にはカウンセリングは主に二〇世紀初頭のアメリカで発達した方法である。カウンセリングはもとと「職業指導運動」「教育測定運動」、そして「精神衛生運動」という三つの領域で発達した。「職業指導運動」とは個人の特性に応じた職業選択を実現するための運動で、セツルメント活動の中で職業相談室を設置して相談員を配置したのがきっかけとなつて広まったと言われている。「教育測定運動」は学校教育の現場で教育指導のためのカウンセリングの普及を進めようとしたもの。「精神衛生運動」は、鬱病をわずらつて入院した人物が病院で虐待を受け、この経験を踏まえて、より適切な精神障害の治療法をタンキユウ^(キ)してたどり着いたものであった。いずれも相談員が助言を行う場を設定しているのが特徴で、これが現代のカウンセリングの元になったと考えられている(『カウンセリング辞典』)。

六 このようにカウンセリングはある程度明確にその起源が特定されているわけだが、歴史的に見れば、それは人類^(ク)にタイコからある「相談」の様式を制度化したものにすぎないとも言えるかもしれない。たとえばキリスト教では古くから懺悔^(グ)という儀式があり、密室で神父に対して罪の告白を行うことで、一種のカウンセリングが行われてきたわけだし、ギリシャや中国では弟子と師匠との間にかわされる問答が、英知の習得のための重要な手段として機能してきた。人から人へ知恵が伝えられるとき、必ずしも自然な教えの形をとるとは限らない。儀式性を伴った閉じた空間で、型に従ったやり取りをすることが助けともなる。演劇的^(d)と言つてもいいような、参加者による役割分担もある。キリスト教会の懺悔^(グ)の秘蹟^(カ)に典型的に見られるのは、相談者が幼年者のな位置に立つことで「相談」の場の形成をするという例である。

七 ただ、現代に入つてカウンセリングという方法がさらなる広がりを見せていることには注目する必要がある。医療や職業選択、勉学に関するものなど、もともと専門性の高い領域における「相談」に限らず、住宅や車といった高価な商品の購入や、わかりにくい携帯電話のプラン、生命保険などの説明、さらには従来は個人の責任において行われてきた、資産の運用や結婚といったプライベートな領域でもカウンセ

セリングめいた「相談」の場は広がりを見せている。

八

こうした「相談」は——たとえ「無料」^(A)を謳^(ウタ)ったものであっても——ビジネスに直結したものがほとんどで、二〇世紀初頭のアメリカで発達したカウンセリングのジゼンの側面はほぼ失われている。ただ、そこには形式として、より知識を持つ者が、持たない者や情報的な弱者を本人にとって有利な道に導くという前提がある。ということは、こうしたカウンセリングを利用する段階で、利用者は庇護^(ひご)される側に進んで自分を置いていることになる。もっと言えば、カウンセリングの場において、利用者はトウガイ領域^(トウガイ)の事情に^(B)昏い、未成熟な自分、幼い自分を受け入れることになる。そこではちょうどキリスト教の懺悔の秘蹟と同じように、閉じた演劇的な空間の中で、教えを与える熟練者と教えを受ける未熟者という関係性が演ぜられている。

九

それは一時的な演技にすぎないという見方もあるだろう。自分にとって有用な情報を得るために、とりあえずその場では「相談員」の言うことに耳を傾けてみせるが、実際にそれを信じたり言われた通りにするかは別問題。利用者主体で選択がなされるのであれば、サービスの提供者と利用者とは、ほぼ対等の位置にあると言えなくはない。

十

しかし、たとえそうであったとしても、現代の消費行動の多くが少なくとも一時的には自分を庇護されるべき未成熟な者の位置に置き、相談員たる相手の指導やアドバイスに接するという形をとっていることはうたがいない。私たちは日々、いや、一生涯、こうした関係性を生きることを余儀なくされているのである。私たちはつねに、幼く未成熟な者として振る舞うことを強制されているのだ。

(阿部公彦『幼さという戦略』による)

(注1) フィリップ・アリエス……フランスの歴史家(一九一四—一九八四)。

(注2)フロイト……ジークムント・フロイト。オーストリアの心理学者、精神科医(一八五六—一九三九)。

(注3) 心靈主義……人は肉体と靈魂からなり、肉体が消滅しても靈魂は存在しつづけるという考えのこと。

(注4) ネオプラトニズム……プラトンの教えを基盤とし、万物は一つの源流から流れ出したものと捉える思想のこと。

(注5) セツルメント活動……貧しい人々の暮らす地域に居住し、生活の向上につとめる活動のこと。

問一 傍線部(ア) (イ) (ウ) のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。 解答
番号は

1

10

。

(ア) ケイキ

1

- ① ケイフをたどる
- ② ケイコウとなるも牛後となるなかれ
- ③ ケイバジヨウへ行く
- ④ ケイヤクを守る
- ⑤ 文学にケイトウする

(イ) セイチ

2

- ① カンセイはがきを使う
- ② セイヤクシヨを書く
- ③ はじめにセイを名乗る
- ④ この世にセイを受ける
- ⑤ 仕事にセイを出す

(ウ) ホドコシ

3

- ① 線路をシク
- ② 計画をジツシする
- ③ 社会の発展にシする
- ④ シモン機関が答申する
- ⑤ ジツシに余る功績をあげる

(エ) サカノボる

4

- ① アユのソジョウを調査する
- ② ソセンの墓を掃除する
- ③ ソシヨクは体に良い
- ④ 粘土でソゾウを作る
- ⑤ 岩石のソセイを調べる

(オ) ノびる

5

- ① エンシンリヨクを利用する
- ② エンゲイジヨウで落語を聞く
- ③ エンニチで朝顔を買う
- ④ コリツムエンの状況に耐える
- ⑤ 試合はウテンジュンエンとなった

(カ) 飛びカッて

6

- ① マチコウバで働く
- ② 祭りでコウツウセイリが必要になった
- ③ コウニユウの決め手は値段だった
- ④ コウリヨウを使っていない洗剤は少ない
- ⑤ 思わぬソウジヨウコウカが生まれた

(キ) タンキユウ

7

- ① 魚群タンチキを使って漁をする
- ② タンテキな説明を求める
- ③ 教科書のタンゲンで学ぶ
- ④ タンリヨクのあるところを見せる
- ⑤ タンネンな調査で実態を明らかにする

(ク) タイコ

8

- ① 付近イッタイが雪に覆われる
- ② ジンダイな被害をもたらす
- ③ シキシダイに沿って進める
- ④ 祭りでタイコを打ち鳴らす
- ⑤ イッセイイチダイの芝居を打つ

(ケ) ジゼン

9

- ① ジヨウのある食物をとる
- ② 日照りの畑にジウが降る
- ③ ショジキンを確認する
- ④ ジミチな努力はいつか実る
- ⑤ 迷惑をかけないようジチヨウする

(コ) トウガイ

10

- ① ガイハクな知識を誇る
- ② 情勢をガイカンする
- ③ 不正をダンガイする
- ④ 図形のガイエンをなぞる
- ⑤ 不当な扱いにフンガイする

問二 二重傍線部（A）（B）の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11、

12。

（A）謳った

11

- ① ほめたえた
- ② あざむこうとした
- ③ はっきり示した
- ④ リズムよく語った
- ⑤ 大げさに言った

（B）余儀なくされている

12

- ① 束縛されている
- ② 立ち向かう必要がある
- ③ 礼儀とされている
- ④ 順応しなければならない
- ⑤ 避けては通れない

問三 傍線部（a）「近代になってはじめて独立した幼年期というものが意識されるようになった」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① 中世以前の人々には幼年期がなく近代より早く大人になっていた事実が、絵画から明らかになったということ。
- ② 絵画に表れているように、中世以前の社会では大人と子どもが区別されていなかったということ。
- ③ 中世以前の絵画では、幼年期の輝きを写しとる方法や道具が開発されていなかったということ。
- ④ 中世以前には、大人の顔をした子どもを描くことで、幼年期の特殊性を際立たせようとしていたということ。
- ⑤ 中世以前の社会は大人を中心にして構成されており、子どもへの配慮が不十分だったということ。

問四 波線部（あ）『若き日の芸術家の肖像』と波線部（い）『失われた時を求めて』に共通する特徴はどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 幼い登場人物に焦点を当てるとい手法で、幼年期の愛おしさを存分に語りつくそうとしていること。
- ② 視点人物を子どもに設定して、子どもならではの感覚や用語によって語りを構成しようとしていること。
- ③ 幼い人物を語り手に設定して、大人には不可能な子どもの語りをありのままに再現しようと工夫したこと。
- ④ 大人がすでに失った輝きをもつ子どもを主題化し、自らの過去を振り返って懐古的に語っていること。
- ⑤ 幼い登場人物を語り手や視点人物として採用し、輝きを失った大人の語りを刷新しようとしたこと。

問五 空欄 X に入る最も適切な人名を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① プルースト
- ② ジョイス
- ③ デイケンズ
- ④ フォークナー
- ⑤ エリオット

問六 傍線部（b）「幼年期の体験が、心の薄暗い領域に人目につかない形で住み続ける」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 「心の薄暗い領域」とは、フロイトが指摘した「無意識」のことであり、人間の「意識」では見えないその場所に、幼時体験の影響が残りつづけるということ。
- ② 「心の薄暗い領域」とは、大人の制御の及ばない「無意識」のことであり、幼年期の後ろ暗い体験は、「無意識」の陰に隠れるように存在しているということ。
- ③ 「心の薄暗い領域」とは、フロイトが指摘した「無意識」のことであり、大人の目につきにくいその場所に、過去の悪行で痛む良心を隠しておけるということ。
- ④ フロイトの発見により、「心の薄暗い領域」つまり「無意識」に、大人には制御できない子どもの異常な行動の原因もあることが明らかになったということ。
- ⑤ フロイトの発見により、「心の薄暗い領域」つまり「無意識」に光があたり、そこに潜んでいた幼年期の体験が引き出されて大人の精神疾患がいやされたということ。

問七 傍線部（c）「疑似宗教として機能するようになったものがある。カウンセリングである」とあるが、なぜ「カウンセリング」が「疑似宗教として機能する」のか。その理由として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① カウンセリングは、古くから宗教に存在するような儀式的な場を設けて、相談員が相談者を支援しようとする行為だから。
- ② カウンセリングは、無償で相談者の話を聞いて支援する相談員という形で、宗教的な超越者に近い存在を出現させたから。
- ③ カウンセリングは、宗教が儀式的な場での対話を通して行ってきた、精神という目に見えないものを救う行為だったから。
- ④ カウンセリングは、キリスト教の儀式の一つだった「懺悔」を近代という時代にあわせて改革したものだったから。
- ⑤ カウンセリングは、その先駆けとなる精神分析を行ったフロイトを、新たな宗教的な超越者として人々に認識させたから。

問八 傍線部(d)「演劇的と言ってもいいような、参加者による役割分担もある」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 舞台のような空間を設定し、二者のうち一方が師匠の役を、もう一方が若い弟子の役をつとめる様子を見ることで、見ている多くの人々にも知恵が伝えられるということ。
- ② 整えられた空間と、相談者の悩みや課題を引きだしやすい対話の流れが設定されていることで、相談を受ける人が神父や師匠のような上位の立場をとりやすいということ。
- ③ 他者をまじえない閉じた空間が設定されていれば、相談者は幼年者のような役割を引き受けることを恥と思わず、自分の悩みや弱みをさらけだしやすくなるということ。
- ④ 相談員と相談者が演劇の舞台のように整えられた空間に置かれることで、大人と子どものように上下関係のある役割を受け入れて、やりとりしやすくなるということ。
- ⑤ ある程度、様式の定まった空間で、二者のうち一方が上位者として知恵や許しを与え、もう一方が下位者としてそれを受け取る状況があらかじめ設定されているということ。

問九 傍線部(e)「プライベートな領域でもカウンセリングめいた「相談」の場は広がりを見せている」とあるが、「相談」が「カウンセリングめい」ていると言えるのはなぜか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 「相談」は「カウンセリング」と違って、専門性の高い公的な領域内ではなく、車や携帯電話の購入といった一般の人々の個人的な消費活動のなかで行われる。しかし、相談員が利用者より多くの知識を持つため、必然的に医者や教師のように公的な上位者となるから。
- ② 「相談」には、「カウンセリング」にあつたような、金銭を介さない助け合いの側面はない。しかし、知識や情報を持つ各分野の熟練者としての相談員は、子どものように無知で未成熟な利用者に閉じた空間で接するうちに、利用者を心情的にも教え導くようになるから。
- ③ 「相談」は、金銭の受け渡しがない場合でも経済活動につながる点で「カウンセリング」とは異なる。しかし、演劇的な空間で、相談員は熟練者として利用者にアドバイスをするという上位者の役割を演じながらも、しだいに利用者と対等の関係が築かれていくから。
- ④ 「相談」は「カウンセリング」と違って、相談員やその属する組織の経済的な利益につながる。しかし、「相談」は様式化された空間で行われ、情報や知識をより多く持つ相談員が成熟した大人のように、それらを持たない利用者が未成熟な子どものようにふるまうから。
- ⑤ 「相談」は企業による利潤追求活動であり、「カウンセリング」のように、利用者に有利なアドバイスは行われない。しかし、儀式的な空間で、知識や情報を多く持つ相談員が成熟した大人として、利用者が幼く未成熟な者としてふるまうことで成立するものだから。

問十 本文の段落構成について述べた文として適切ではないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 一・二では、ある現象の歴史的な推移を追いながら、この文章の主題を示している。
- ② 三でまとめたことに四で異なる知見を示し、五で新たに加わる事例を引きだそうとしている。
- ③ 四では、一・三で述べたことをまとめながら反例を示し、五で話題を変える布石としている。
- ④ 六では、五で登場させた事例と結びつけながら、一・三で示した主題とのつながりを導きだそうとしている。
- ⑤ 七・八では、ここまで述べてきたことを総合して、自説を理解させようとしている。
- ⑥ 九・十では、読者による異議や疑問を想定し、それに答えながら、自説を補強しようとしている。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

批評家として最初の本を出してから急に忙しくなると、家や故郷とのつながりはどんどん失われていきました。

なにせ最初の本が最先端のニューヨークのアートやシカゴの音楽について書いたものであったので、よけいでした。実は最初にそれらについて書いたとき、私はまだパスポートも持っていないでした。とうぜん日本の外には一度も出たことがありませんでしたし、それどころか飛行機にさえ乗ったことがなかったのだ、ニューヨークやシカゴの文化について論じると言っても、大半は写真や音源、そしてわずかな文献にもとづくものでしかなかったのです（まだネットはおろかパソコンもない時代です）。実際のところ、頼りになるのは想像力だけでした。

A、そのころはまだ、それでもとくに遅れているというような境遇ではなかったのです。格安航空券などはまだ夢にも存在していなかったし、情報（そもそも、それは情報だったのでしょうか？）はつねに解消することのできない遅れを伴っていて、結局、世界の大半は文字のなかにありました。それに、私が敬愛するエッセイストの植草甚一^{（注1）}や文学者の澁澤龍彦^{（注2）}は、あれほど海外の文化や芸術に通じていて、豊穠^{ほうじょう}な語りで読む者を虜^{とり}にしなが、海外への渡航体験はまったくないか晩年になってからで、それなのに植草さんなどは、ニューヨークのどこそこの角を曲がるとこんなゴミ箱があるという自分の目で見えたような語りまでしていたのですから、世界は本当にかねがねが読む雑誌や書物のなかにあったのです。

いまのように誰でも気軽にびっくりするほど安価で海外に出ることができ、印刷された本を手に入れるよりもはるかに早くリアルタイムで世界の様子がどんどん伝わってくるようになってしまつては、そんなことは思い描くことさえむずかしいかもしれません。植草さんの本などでは、当時出ていた雑誌から引き写したような文章がけっこうあることも知られています。事実、いまなら著作権侵害だと物議を醸しそうな書きつぶりだったのですが、しかしそれは「盗作」^{（2）}とも「剽窃」^{（注3）}ともまったく違うものでした。そのころは、雑誌や本が海外から輸入され、ちよつと敷居の高い書店に並び、そこに時間をかけて足を運んで手に取り、ゆっくりと頁^{ページ}をめくることが初めて浮かび上がる世界というのがあり、そして、それがすべてに先立つ体験でさえある時代がたしかにあったからです。

ここでちよつと立ち止まって考えてみたいのは、これだけ情報が世界的な同時性を獲得し、国境を越えるような人の移動もごく日常的になつてみて、ではもつとはるかにいろいろなことが不便であった時代に比べ、人間の想像力そのものが拡大しているかというところ、そんなことはぜんぜんないのでないかと感じることです。それでは植草さんや澁澤さんの文章が、いま読むとまったく時代遅れで読むに値しないかということ、ことはむしろ逆で、生活の利便性がすべてにわたって極限まで高められているいまのような時代に描かれている文章と比べたとき、実はずつと

味わいがあり、得るものも多いように思えて仕方がないのです。

B、私たちは本当のところは、情報など必要としないのではないのでしょうか。いまは、たとえばなにを食べに行くにもネットで検索し、評判のいい店に行こうと誰もが考えます。そしてそこそこのいい店に行き当たり、まあまあ満足したとしても、それは結局、費用対効果でしかなく、⁽³⁾経験としては貧しいとさえ思ってしまう。しかも、そういう店はたいてい混んでいるし、サービスが滞りがちだし、そもそもネットの書き込みが正しいかどうかの保証だって、まったくないのです。それよりは、いつ行っても温かく迎えられ、見知った客のために顔を思い浮かべて作ってくれ、家にいるように居心地がよく、もちろん味はすこぶるよく、そのうえびつくりするくらい安い。だから何度でも来なくなるし、結局誰も損はしない。そんな店が数軒もあれば、それで十分だし、はるかに贅沢なことです。

読書だって、本質的にはそれと変わりはありません。究極的には、客観的になが書かれているかではなく、誰に向けて、どのように書かれているかのほうが大切です。でも私は、仕事で自由に海外に出ることができるようになって初めて、そういうことを肌で体感するようになりました。そこで、書き方も大きく変化したのです。

いまでは、自分が生まれ育った、決して変えることのできない風景や記憶というのをながしろにしては、どんなに抽象的で思弁的なことを書こうとしても、うまくいかないことがよくわかっています。

冒頭に戻ると、物書きとして忙しくなって海外を飛び回り、故郷や親しかった友人との関係が失われていくと、情報は正確で知識の量は増えても、文章はどんな形式的になり、文体と言えるものを失って、専門家にしか届かなくなってしまう。学者ならそれでもいいのかもしれませんが、私は批評家なので、書いたものを読んでもくれる人は学界の人たちではなく、どちらかといえば一般の人たちです。その人たちのことを私は知りません。でも、自分のことをよく知っている人が私の書いた文章をどう読むだろうかという感覚はつねに残っているから、やはりその人たちによくわかってもらいたいと思うながら書きます。そしてそれが結局、書き手が読者を想定することなのだと思うのです。

私はいま、故郷の秩父^{ちちぶ}に季節の折ごとに帰るようになりました。故郷に帰ると、親やきょうだい、親戚はもちろん、小学校のころ一緒に遊んだ友達や、近所のもう本⁽⁴⁾にいい年のおじさん、おばさんにも顔を合わせます。もう一家を構えているので、帰るといのは本当は変なのですが、やはり帰るとい⁽⁴⁾のがいちばん近い感覚だという気がします。秩父に帰れば、数十年を経て大きな変化があったようにいて、変わらない部分は実はまったくと言っていいほど変わっていないのです。

それは本当にそうで、先日小学校に上がる前に住んでいた家の周囲を散歩していたら、そのころもあった堀の石垣がまったく変わらず残っていて、思わずそのころの風景、というよりも気持ちのようなものがよみがえってきて、たちまち時間が逆戻りし、子供の頃に還^{かえ}ってしまった気がして、自分でも驚いてしまいました。そして書き手（私の場合は批評ということになります）にとっては、扱う問題が抽象化し、時間や空間的に遠方に行く必要が出てくればくるほど、根本的には時間や空間に規定されない、そういう不可解な体験が、どうしても必要になってく

るのです。

C なぜ書くのか。そこに理由はありません。書くのは、突き詰めればお金儲けのためではないし、有名になるためでも、褒めそやされるためでもありません。もちろん、本を出せば売れてほしいし、名前を知ってほしいし、評価されれば心から嬉しいことです。しかし、だけでもそのために文章を書くのかというと、それ自身が目的であるとはどうしても思えません。

D なぜなのでしょう。こんなことを考えていると、私はふと、失われた時間や場所を想像力によって取り戻し、そのことで蘇る、自分のなかに眠る天空の宇宙のように不滅ななにかを、読む人とわずかの時間だけでも分かち合うために書いているような気がするところがあるのです。「いったい、それは批評なのか？」と問われるかもしれませんが。しかし私にとっては、それこそが批評であり、作り手と受け手との意識の分裂から生まれる文章でしかできない動機づけなのです。それは、いついかなるときでも、どこにいてなにを考えていても、ごくごく具体的な生活の雑事や、過去の容易には消えない記憶にしっかりと深く根を張っています（念のため言っておくと、これは人のアイデンティティというようなたぐいの話ではありません）。それがなにかの拍子にすっぱりと抜けてしまったとき、批評家は死ぬのだと思います。

（榎木野衣『感性は感動しない』による）

（注1）植草甚一……エッセイスト・評論家（一九〇八—一九七九）。

（注2）濫澤龍彦……小説家・フランス文学者・評論家（一九二八—一九八七）。

問一 空欄 A (D に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

21。

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|--------|
| ① | A 〓なぜなら | B 〓けだし | C 〓けれども | D 〓では |
| ② | A 〓けれども | B 〓いわゆる | C 〓そもそも | D 〓でも |
| ③ | A 〓けれども | B 〓思うに | C 〓そもそも | D 〓けだし |
| ④ | A 〓なぜなら | B 〓いわゆる | C 〓けだし | D 〓でも |
| ⑤ | A 〓けれども | B 〓思うに | C 〓そもそも | D 〓では |

問二 傍線部(1)「世界の大半は文字のなかにありました」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 世界の多くの国々で、テレビやラジオのような映像・音声メディアが十分に普及していなかったということ。
- ② 世界の多くの国々で、海外の最先端の文化を伝達するために、評論家や学者の力が必要であったということ。
- ③ 海外の文化や芸術などに関する情報に関する書物や雑誌が、飛ぶように売れる時代であったということ。
- ④ 海外の文化や芸術などに関する情報源は、もっぱら海外から輸入された書物や雑誌であったということ。
- ⑤ 海外の文化や芸術などに関する情報源となった文化人に、海外渡航の経験がほとんどなかったということ。

問三 傍線部(2)「それは「盗作」とも「剽窃」ともまったく違うものでした」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

- ① 海外の本や雑誌にアクセスできるのはごく少数の人たちであり、多くの人たちにとっては手の届かない貴重な資料だったから。
- ② 著作権という概念がまだ普及しておらず、読者も書き手も権利の侵害に当たるなどとは、まったく考えていなかったから。
- ③ インターネットの普及などで生活の利便性が高まった現代に読み直してみても、味わいがあり、得るものが多い文章だから。
- ④ 海外の文化が印刷物を通じてゆるやかに伝達されていた環境で、当時の読者の想像力を刺激する文章であったから。
- ⑤ 書き手のなかに悪意がなかった以上、自己の利益よりも公共の利益を優先したかけがえない創作活動であったから。

問四 傍線部(3)「経験としては貧しい」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① 検索可能な情報もたらす経験は、自己とのあいだで築かれる固有な関係性が欠落しているがゆえ、単純で平板なものにすぎないから。
- ② 検索可能な情報への依存は、競争による効率を追い求めすぎることになり、逆にサービスの低下を招いてしまいがちだから。
- ③ 検索可能な情報は次々に更新されていくため、常連として迎えてくれる店を見つかるまでに、かなりの時間が必要となるから。
- ④ 検索可能な情報は人気や評判によって更新されていくため、他者による評価に従属する奴隷的な自己を生み出してしまうから。
- ⑤ 検索可能な情報には虚偽も多く含まれるため、真偽の混濁した状況のなかで判断を誤り、損をする経験も増えていくから。

問五 傍線部(4)「やはり帰るといのがいちばん近い感覚だという気がします」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 筆者の批評の対象は主に日本国外の文化や芸術であり、海外文化に精通している立場からすると、生まれ育った故郷は、現在の活動よりも過去の記憶や体験と深く結びついているから。
- ② 日本国外の文化や芸術の批評を書いている筆者が、生まれ故郷に家を構えるようになったとはいっても、一年中そこで暮らしているわけではなく、仕事で海外に足を運ぶことも少なくないから。
- ③ 日本国外の文化や芸術の批評を書いている筆者にとって、故郷とは表面的には変化しているように見えても、忘れていた過去の記憶や失われていた感覚がふと呼び戻される体験を得られる場所だから。
- ④ ごく一般論として、故郷という場所はそもそも、生まれ育ったかけがえのない場所のことを指すため、現在の生活拠点や仕事の内容にかかわらず、帰るべき場所であることに変わりはないから。
- ⑤ 日本国外の文化や芸術の批評を書いている筆者にとっての故郷とは、世界や自己において不滅なるものを感じさせてくれる霊的な場であり、非日常の回路へ通じる直接的体験が可能な場所であるから。

問六 筆者の「批評」に対する考え方として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 虚偽の情報が拡散されるインターネット社会においては、人々の価値観が揺らぐ危険性があるため、文章を通じて絶対的な価値について思考する批評は、専門家だけではなく、一般の人々にとっても重要な意義をもつ。
- ② 批評には、客観的な情報が正確に記されていなければならない一方で、読者を魅了する豊かな語りもまた求められるため、海外からの情報が限定的だった時代の評論家や作家の文章から、技術を学ぶべきだ。
- ③ 海外の異質な文化を批評的に論じるには、日本固有の風土に根差した体験が重要な足場となるため、海外文化の知識を身につけるだけではなく、たびたび故郷に戻り、家族や友人に読者になってもらうことが大事だ。
- ④ 批評は、いかに抽象的で思弁的であったとしても、その思考の根底には、自分の生まれや育ちに固有の経験が介在しているため、批評家は自分が何者であるかを確認しつづけないといけない。
- ⑤ 批評を書く目的は、失われてしまった過去の記憶や風景を想像力によって回復し、家族や友人のみならず、他者に対しても一時的にはあれ、自己のなかの不滅なものかを共有することだと考えられる。

〔二〕「古文」 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

平治の乱で平清盛に敗れた源義朝の妻である常葉は、幼い三人の子（八歳、六歳、二歳の兄弟）を連れて京の伏見の叔母を訪ねたものの見捨てられてしまった。そうしたところある年かさの女が、常葉ら母子たちに仮初めの休息の場を提供してくれたのが以下の場面である。

六つ子は歩み疲れて、何心もなく膝の傍らにぞ伏したりける。八つ子は父義朝を忘れず、母が涙も尽きせねば、うちとけまどろむこともなし。常葉、壁に向かひて、忍びあまる涙、せきあへず。

夜更け、人しづまりてのち、母、八つ子が耳にささやきて言ふやう、

「あな、むざんの者どもが（注3）ありさまや。世にある人は、十人二十人、子を育つる人もあるぞかし。後れ先立つことは憂き世のならひと言ひながら、同じたけ諸白髪になり、のちは二親の跡を訪ふためしもあるぞかし。おのれらを三人持ちたるが、（注4）せめては一人、添ひ果てよかし。明日はいかなる者の手にかかりて、何たる目にかあはむ（注5）ずらむ。水にや沈められむ（注6）ずらむ、土にや埋まれむ（注7）ずらむ。母とて我を頼まむことも、子とて汝らを育まむ（注8）ことも、明くるを待つ間の名残ぞかし。」

と、泣く泣くかき口説きければ、八つ子が言ふやう、

「さて、われ死なば、母は何となるべきぞや。」

母、

「おのれらを先立てて、一日片時も耐へてあるべき身ならばこそ。もろともにこそ死なむ（注9）ずらめ。」

と言へば、八つ子、われらに離れじとて、母も死なむ（注10）ずらむ嬉しさに、

「母にだにも添ひてあらば、命、惜しからず。」

と言ひて、顔に顔を並べて、手に手を取り組みて、仮にもまどろまで泣き明かす。

（『平治物語』による）

（注1） 世にある人……世間に時めいて栄えている人。

（注2） 後れ先立つこと……相手に先立たれたり自らが先に死んだりすること。

（注3） 同じたけ諸白髪になり……夫婦が同じように長生きして、同じように白髪となること。

（注4） 二親の跡を訪ふ……両親を供養すること。

（注5） 一日片時も耐へてあるべき身ならばこそ……わずかの間も耐えて生きていられるような身ならばよいが（到底無理なことだ）。

問一 傍線部(ア)「忍びあまる」の現代語訳として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 使い切れない
- ② 秘密が露見しそうになる
- ③ 我慢がたい
- ④ 懐かしく思わずにいられない
- ⑤ 何とか持ちこたえた

問二 傍線部(イ)「むざんの者どもがありさまや」とはどういうことか。その説明として適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28。

- ① 我が子が母と一緒にではあるものの安心して休めるような場に身を置いていないということ。
- ② 幼い人たちが伏見の叔母にまでも非人情な応対をされたということ。
- ③ 幼子たちに近く残酷な運命が訪れるかもしれないということ。
- ④ 我が子たちが命にかかわるような拷問にかけられかねない状況に置かれているということ。
- ⑤ 幼い息子達が世間から非人道的な扱いを受ける理由が分からずに途方に暮れているということ。

問三 傍線部(ウ)「おのれらを三人持ちたるが、せめては一人、添ひ果てよかし」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① 三人もの息子を持ったのであるから、せめて長子の八つ子は生き残って父義朝一行と合流し武士の人生を全うして欲しいということ。
- ② 明日の逃避行も険しいものであろうが、兄弟のうち誰か一人は自分に最後まで付いて来てくれるだろうと信じているということ。
- ③ 命が失われることも覚悟せざるを得ない状況だが、それにしてもいちばん幼い子の命だけは助かって欲しいと思っているということ。
- ④ 三人の幼子たちのうち、どうか一人は自分が最期を迎えるまで側にいて欲しいと願っているということ。
- ⑤ 幼いとはいえ無惨な殺され方をすることもあるかも知れないが、せめて一人の命は助けてくれることだろうと信じているということ。

問四 傍線部(エ)「むずらむ」の文法的説明として、最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 30。

- ① 推量の助動詞「むず」＋推量の助動詞「らむ」
- ② 推量の助動詞「む」＋打消の助動詞「ず」＋伝聞の助動詞「らむ」
- ③ 意志の助動詞「む」＋打消の助動詞「ず」＋推量の助動詞「らむ」
- ④ 婉曲の助動詞「むず」＋推量の助動詞「らむ」
- ⑤ 推量の助動詞「む」＋打消の助動詞「ず」＋伝聞の助動詞「らむ」

問五 傍線部(オ)「母にだにも添ひてあらば、命、惜しからず」とあるが、このときの「八つ子」の心情の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 31。

- ① 三人の兄弟の後を追って死ぬという母の思いを聞いて、人は皆、等しく死を迎えるものであるという真理を幼いながらに悟った。
- ② 一人でこの世に生き長らえることはないという常葉の言葉を聞いて、母と離れないのであれば死は怖くないと思った。
- ③ 自分より幼い二人の弟が死地に向かうのを恐ろしがるのが心配であったが、母が一緒にあれば弟たちも怖がらないと安心した。
- ④ 常葉の側を離れず一緒にいれば、死を避けることが出来そうであると聞き、母の側を絶対に離れまいと決心した。
- ⑤ 子どもの後を追ひ死ぬことはないという常葉の思いを知り、母の命を守り抜き、武家の子としての気概は保てそうだと安堵した。あんど

問六 本文の場面の説明として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 32。

- ① 八歳の息子については、年長者として幼い弟二人にも増して母の常葉を気に掛けており、また源義朝の子であることを自覚して育っている様が語られている。
- ② いちばん年少者である二歳の幼子については、この場面の本文には特にその動静が語られていない。
- ③ 常葉については、義朝の子三人をいかに守り育てるかという母親としての不安や必死な思いと共に、また一方では夫婦が仲良く添い遂げられなかったことを嘆く思いも語られている。
- ④ 疲れて寝入った六歳の子に比べ、八歳の子の長子としての自覚やたくましさに将来への思いを強くする、母常葉の安堵が語られている。
- ⑤ 幼くとも武士の子である子供たちは、明日はどうなるかも知れない身であるが、里の女の計らいにより仮初めにも身を寄せ合う折りを得て、その母子の情愛の深さが印象的に語られている。

問七 『平治物語』とは異なるジャンルの作品を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33。

- ① 『平家物語』
- ② 『太平記』
- ③ 『方丈記』
- ④ 『義経記』
- ⑤ 『曾我物語』